

大動脈縮窄症の術後経過

福岡大学医学部小児科 小 田 禎 一
九州大学医学部心臓外科 徳 永 皓 一
" 安 井 久 喬

1. 目的

大動脈縮窄症の術後長期経過を、調査表によって知ろうとした。

2. 方法および対象

昭和30年から51年末までに九州大学第1外科および心臓外科で手術を行った14例に調査表を発送し、10例の回答を得た(回収率71.4%)。他は転居先不明である。対象者は大動脈縮窄(Co/A)だけで、大血管転換(TGA)は

1例もなかった。

3. 結果

病型、術式、年齢、経過年数、症状の変化は表に示す通りである。症状をあらわす数字(1, 2, 3, 4)は次の通りである。

(1) 日常生活および仕事・運動をするのに何の苦痛もなく、ふつうの健康な人たちと、ほとんど同じようにできる。

T. ODA (FUKUOKA UNIV.), K. TOKUNAGA, H. YASUI (KYUSHU UNIV.)

No.	AGE	SEX	DIAGNOSIS	METHOD OF OPERATION	AGE OF OPERATION	FOLLOW UP PERIOD	SYMPTOMS	
							PRE-OP.	POS-TOP.
1	3	F	PREDUCTAL VSD, PDA	PDA div. Plasty of Co/A & PA banding	0 10/12	2 11/12	3	1
				PA debanding (VSD: spont. closed)	2 7/12	0 3/12	1	1
2	4	M	PREDUCTAL VSD, PH	PA banding, plasty of Co/A	0 9/12	4 0/12	3	2
				VSD closure, PA debanding	4 6/12	0 3/12	2	1
3	8	F	POSTDUCTAL VSD, PDA	VSD closure, PDA ligation	4 6/12	4 3/12	1	1
4	9	M	POSTDUCTAL Albright sy.	Coarctectomy	6 7/12	2 8/12	1	1
5	11	M	POSTDUCTAL PDA	Coarctectomy, PDA division	7 2/12	4/ 3/12	1	1
6	13	M	POSTDUCTAL Mild MR, RPA stenosis	Coarctectomy	4 5/12	8 6/12	2	1
7	14	M	POSTDUCTAL	Coarctectomy	8 0/12	6 6/12	1	1
8	27	F	POSTDUCTAL AR, Aneurysm of asc. Ao.	Coarctectomy	20 4/12	6 11/12	3	2
				Bental	22 4/12	4 2/12	2	1
9	29	F	POSTDUCTAL Isthmus hypoplasia	Plasty of Co/A	22 4/12	2 11/12	1	1
10	35	M	POSTDUCTAL Isthmus hypoplasia	Plasty of Co/A	32 4/12	2 8/12	2	1

- (2) 軽い仕事や運動をするときには大した症状もないが、少し激しいことをすると、動悸、呼吸困難、その他の苦痛や症状がめだつ。
- (3) 静かにしているときは苦痛がないが、少し動くとき症状があらわれ仕事や運動ができない。
- (4) 安静にしても症状があり、ほとんど動くことが

できない。

4. 考察

大動脈縮窄症の術後は、全例において自覚症状が軽減し、長年月の間に再び悪化するものはみられなかった。不整脈その他の出現もみられない。本症の術後長期経過は概して良好であると考えられる。

大動脈縮窄症手術症例の長期予後

東京大学 胸部外科 三 枝 正 裕

当科で1956年より1978年末までに isthmus 型の先天性大動脈縮窄症の手術を受けた症例は29例である。うち早期死亡をとげた7例を除く22例(手術時平均年齢19才; 3~45才)について、平均9年10月の経過観察を行っている。

合併心疾患の有無により本症を三群に分けてみると〔表1〕、I群(大動脈縮窄症のみ)17例中2例(11.8%)死亡、II群(VSD 合併)4例中1例(25%)死亡、III群(その他の重症心疾患を合併)の1例は、術後12年の現在AR, ASDを残留して存命中である。結局、22例中3例(13.6%)を経過観察中に失った。死因をみると、2例は移植グラフト吻合部動脈瘤の破裂のため、各々術後1年半、10年半に失った。他の1例は、ナイロン製グラフトの屈折及びグラフト内血栓症に因り術後1年後に失った。

生存19症例は、ほぼ正常な日常生活を営んでいる。しかし、更に詳細に症例を分析してみた結果、見出された問題は次の4つに集約される。

- (1) 合併心疾患の処理法
- (2) 移植グラフトの運命
- (3) 狭窄の再発
- (4) 高血圧症の持続

(1) 合併心疾患は、一期的根治術で1症例を早期死亡さ

表1 FOLLOWUP RESULT

GROUP	NO.	MEAN FOLLOWUP MONTHS	DEATH	SURVIVALS
I	17	125.5	2 (11.8%)	15
II	4	116.3	1 (25%)	3
III	1	141.	0	1
TOTAL	22	118.	3 (13.6%)	19

せて以降、原則として、二期的に治療することとしており、II, III群5例中3例は、二期的に合併VSDを根治、他の2例は待機中である。

(2) 移植グラフトの運命; 上述の如く遠隔死亡例の全ては、移植グラフトに関係したもので、うち2例は吻合部瘤破裂で失っている。ナイロングラフトの屈折、血栓形成で失った1例は初期の症例である。

表2

(a)

HYPERTENSION
(FOLLOWUP MORE THAN 4 YRS.)

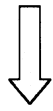
PREOP.	POSTOP.
HYPERTENSION 14 (93.3%)	H: 5 (35.7%)
	N: 9 (64.3%)
NORMOTENSION 1 (6.7%)	N: 1 (100%)
	H: 0 (0%)

H: HYPERTENSION
N: NORMOTENSION

(b)

HYPERTENSION
AND OPERATIVE PROCEDURES
(FOLLOW UP MORE THAN 4 YRS.)

PROCEDURE	H→H	H→N	N→N
GRAFTING 10	3 (30%)	7 (70%)	0
PATCH 2	1 (50%)	1 (50%)	0
BLALOCK-PARK 2	1 (50%)	1 (50%)	0
END TO END 1	0 (0%)	0 (0%)	1



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1・目的

大動脈縮窄症の術後長期経過を,調査表によって知ろうとした。